

「キヤツ！」

と、言つたときり氣絶してしまつた。

家中の人々はその聲で集つて來たが、見るとその階段を赤皮の素晴らしい婦人靴が片方だけピヨコン、ピヨコンと降りて行くのである。

やがて最も勇氣のあつた人が思ひ切つてその靴を追つかけた。

靴はわけなく捉まつて、見ると、二十日鼠が一疋その中に巢をくつてゐて、それが住宅ぐりみ散歩してゐるところだつた。氣の毒なのは二十日鼠で直ぐにたたき殺された。

皆が大笑ひして、さて氣絶してゐる女中も近所の醫者の手あてで何のことなくすんだ。

ところが次の朝であつた。例の神経質な男が起きて顔を洗つて、食堂へ集つて、昨晚あの氣味の悪いやうなをかしいやうな大騒ぎの話をし初めると、外の人たちは、自分たちが何れもそれぞれ一役をつとめてゐるその事件を、まるで初耳のやうな顔をしてきよ、とんと聞いてしまつてから皆は、

「へえ、あなたはいつだつて實に變つた夢をごらんになるのですね」

と言つてまるでとり合はない。

ところが、事實、その見なれない赤皮の靴も片方そこらにあるし、鼠の死骸もごみためにはあるし、そればかりか、女中は近所の醫者のところへちやんと診察料を渡しに行つたのだ。何とも言へない奇妙な氣持がして、われわれの主人公はその日永い間坐り込んで考へつづけた。

——ところで、お嬢さん！

(と、私はここで相手呼びかけて置いて、深く吸ひ込んだシガレットの煙を空中へ吐き出しながら)

——これは一たいどうしたことだと思ひます？

するとそのお嬢さんは、ニツコリとするどころか金切聲を絞つて言つた。

——知つてゐますよ。そんな事ぐらゐ。そりやくだらない作者が出鱈目を書き出して、うまく結びがつかかなかつたのです。

雉子の灸肉

その弟子むかふの岸に到りしにパンを携ふことを忘れたりイエス彼等に曰けるは戒心してパリサイとサドカイの人の麪酵を慎しめよ弟子たがひに論じて曰けるはパンを携へざりし故ならん……云々

馬太傳第十六章

色斯舉矣。翔而後集。曰。山梁雌雉時哉。時哉。子路供之。三嗅而作也。

論語鄉黨第十

孔丘ははたと立とまつた。

「先生、どうかありませんか。」

弟子の子路は狼狽して尋ねた、今も今とて歩きゆくその後姿をつくづく眺めながら、先生もあまりに年を加へられすぎたと切に感じて居た折からであり、それに先生は道を行きながら急に立停つたりなどは、一切なされない方なのだから。

孔丘はだまつて、行く手の谷川に架けられた丸木橋の上を、その節くれだつて微かすかにふるへる指で、しづかに指した。その瞬間、橋の上にうごめいて居たものは、突然ひらりと舞上がった。

「雉子でムいましたか。」

やつと安心した子路は、目でもつてその鳥を追ひかけた。

「……………」

孔丘は物言はずにうなづいて見せて、その目は依然として雉子の影を放さぬのである。何となれば、自然が何時もその息子である人間の誰かに聞かせたいと用意して居る啓示に、孔丘は今ふと耳をかたむけて居るのだから。底までも藍を湛えた晩秋初冬の天に、鳥は稍高く舞上がつて、大きな黒い點となつて彼方此方と翔ることしばらく、とある常盤木の中に身を隠した。

「すべての事は時節ぢや。時節ぢや。今の橋の上の雉子を見たか。」

「はい見ましてムいます。」

獨言のやうな師の言葉に子路は答へた。さうして静かな、寧ろ静かすぎる老師の歩あゆみにつき従うて、また歩み出した。

「あの雉子はね、十歩に一啄、百歩に一飲して、ここの珍らしい温かな日を、谷川のほとりに心ゆたかに遊んで居たものだ、きつと。鳥とても、人間とてもそんな點では、別に、何の變りもない筈だから……いや人には憂ひがある。鳥には無い。鳥には無い。で遊びつかれて橋の上に来たものだ、と私は思ふ。それからさきは、今、其方も見られた。」

斯う、孔丘は歩き乍ら語つた時、丁度橋のところにかかつたので、孔丘は口をつぐんで注意

深い足どりで渡り初めた。橋といふのは三本の丸太から出来て居て藤かづらで互に結びつけられて居る。子路は、靈そのものでも或は影そのものでも歩くかのやうな師の危げに見える後姿を氣づかひて、道化の或るものやうな手つきをして、思はず師の後を抱くやうな象形かたちをした。「『易經』には、今のとはまるで反對の雉子の事があるよ。雉子が吾が身に害を受けて、愕然として飛び上るのぢや。しかし既に片羽は傷んで居る。さうしてその片羽は垂れたまま、雉子はよろけて舞ひ落ちるといふことがね。」

孔丘はここまで語つて口を噤んだ。何故かといふに、或る年の春に見た麒麟の戸のことを、又も思ひ出したからである。

林類のやうに、又いつか子路の話してかかせた石門の門番のやうに、又嘗て自分のうつた聲の聲を聞いて、自分の志を知るとともに自分を笑止がつてくれた無名の一勞働者のやうに、思ひ切つて、世を棄てるのは何でもないけれども、それにしても、どうかして自分の理想のすこしをでも世に知らせねば生きられない自分を孔丘はまたいつもの如くに考へた。さうして時にはその自分を勇ましく尊いと思つた。時にはまた、自分を自分であの簣を荷うた一勞働者のや

うに笑止にも思ふ。孔丘の心は暗くなつた。そこで子路に言ひかけたには、

「由よ、もう歸らうではないか、私は一日も早く『春秋』を書き了へなければならぬ。」

*

「すべての事は時節ぢや。時節ぢや。今の橋の上の雉子を見たか。」

子路は例によつて、老師の言葉を何遍となく繰り返して、心に唱へた。彼はその朴訥な心のなかでひとり考へた。それは多分、雉子を食膳に上すに宜しい時節ぢやと、曰はれたのだ。成程、そうだ。もう十月になる。獵夫の山に行くのも今からだ。全く雉子の肉といふものは不味くはない。それに、師の御老體にすすめるには何よりであらう。

斯う解決して、心あたりに行つて見れば、生憎と雄の雉子しかなかつた。矢張、あの橋の上で見た奴——雌を同じものを出来ることならば差上げたいと考へた子路は、あちらこちらと捜し求めた末に一羽の雌の雉子を得て、いそいそと家に歸つた。さて自分でその胸の肉を割き、自分でこれを炙り、自分で皿に盛りさうして師の夕餉に間に合せやうと、大急ぎで自分でこれを携へて運んだ。

孔丘は皿に盛られた雉子の肉を見て、常に變らぬ温かい顔を子路にむけた。

「由よ、これは又ない馳走であつた。」

併し孔丘は食はうとはしない。但、食はない時の禮儀に依つて、皿を把り上げて、しばらく炙肉のほひを嗅いだ。

「併し、由よ、私は既に、見らるる通りの老體じや。」

さう言つて、孔丘は、再び皿を把り上げて、再び炙肉のほひを嗅いだ。

「されば、許してくれよ、私は食べたくももう齒がないのだから。」

さう言つて、淋しげに笑うて、三度炙肉を把り上げて三度炙肉のほひを嗅いだ。これは折角の御馳走をとわる時の禮儀であつたからである。

「由よ、まことによい香がするぞ。」

最後にさう言つた聲は、何故か、鼻に涕が流れ込んだ人の聲のやうであつた。でなければ孔丘はこの朴訥な贈り物の香にむせたのであつたらう。

*

この話はこれきつりだ。

この話には別にモラルめいたものはない。

併し、茲に、若し人あつて古風な物語のスタイルを愛するあまり、この話の末にも何かそんな風なものがなくては體裁が悪いとおつしやるならば、作者は敢て、その人のために、何かモラルを工夫して見てもいいのだ。

れ——ではつけて置かう。

「或人の言ふところを、他の人は、決して言ふた人の心どほりに聞かない。併し人々よ、そこに就て立腹してはならない。」

昭和二年十二月七日印刷
昭和二年十二月十二日發行

(定價二圓二十錢)

——集年十夫春藤佐——

著者	佐藤春夫
發行人	東京市牛込區肴町一二 涌島義博
印刷人	東京市神田區雉子町三十四番地 小林龍介
印刷所	東京市神田區雉子町三十四番地 成章堂時枝印刷所

東京市牛込區神樂坂通り

圖代進目録

發行所

南 宋 書 院

電話牛込一四六一番
振替東京七五三二八番

南宋書院刊行文藝書

眞山青果著 明君行狀記 (戯曲集)

定價一圓五十錢
送料十錢

正宗白鳥著 勝敗 (戯曲集)

定價一圓二十錢
送料八錢

ヅエレサーエフ著 醫者の記録

定價一圓五十錢
送料十錢

アラシ・ポオ著 龍膽寺曼譯 フエル博士との治療法

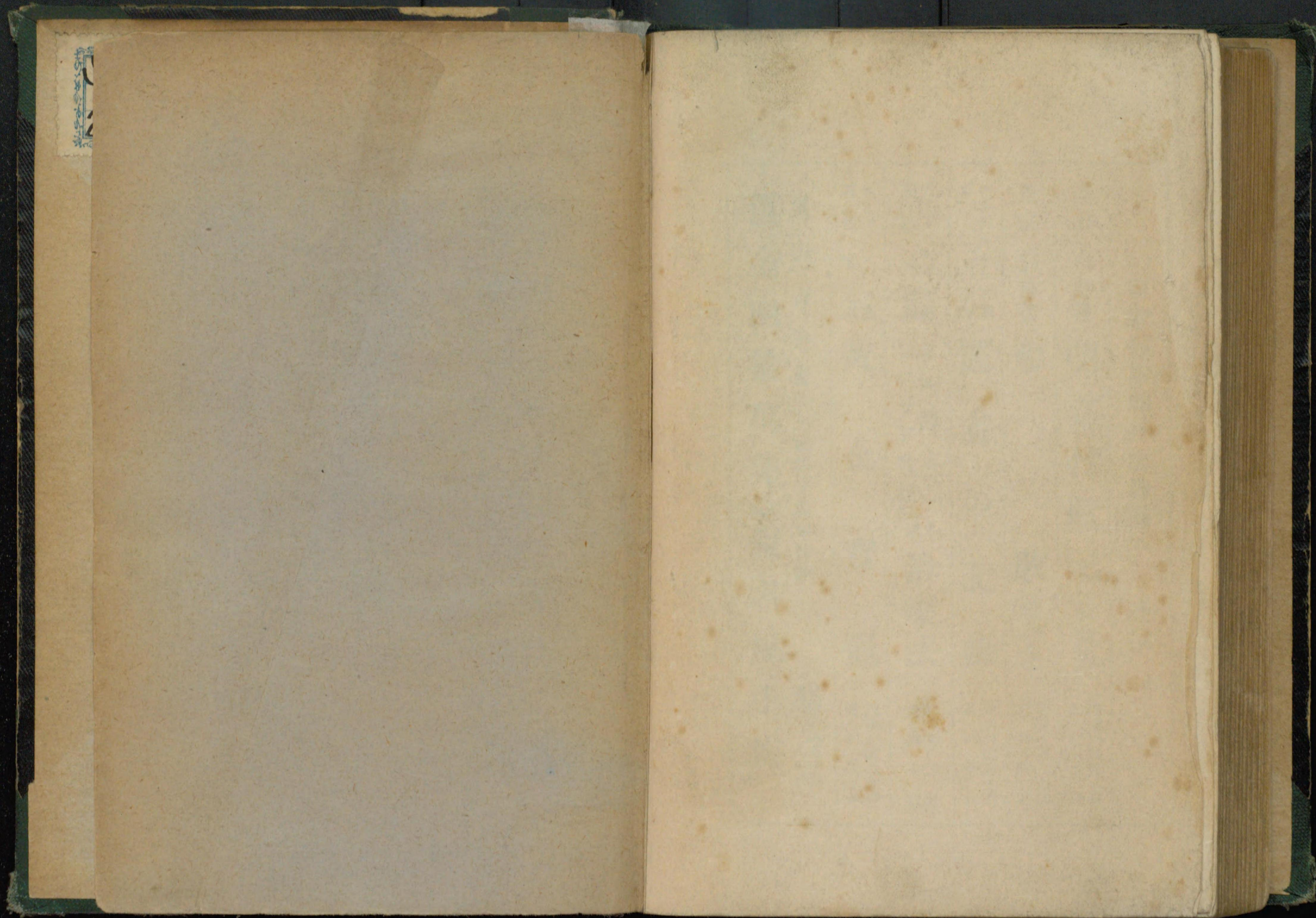
定價二圓
送料十二錢

石川道夫譯 黃金寶壺

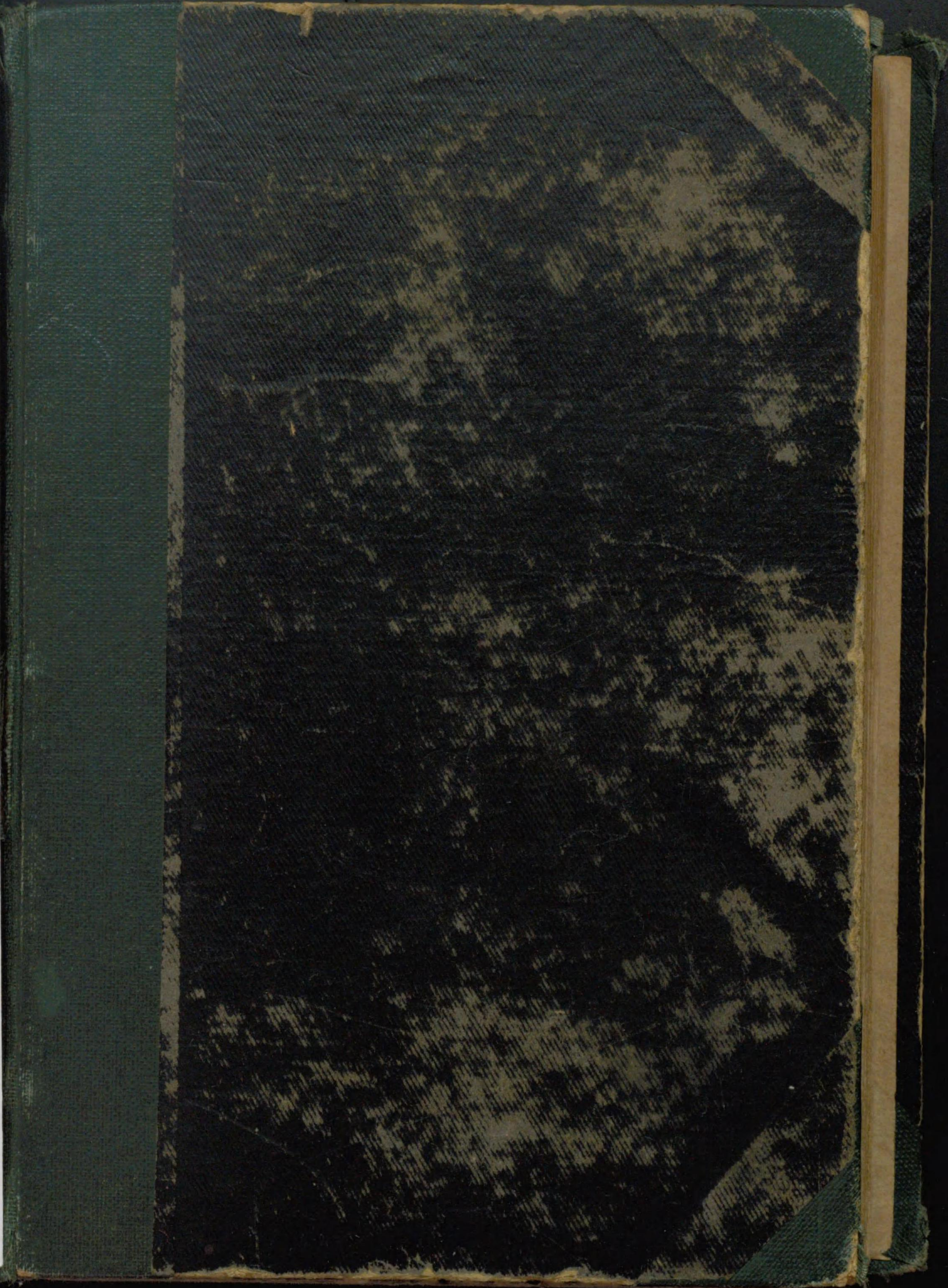
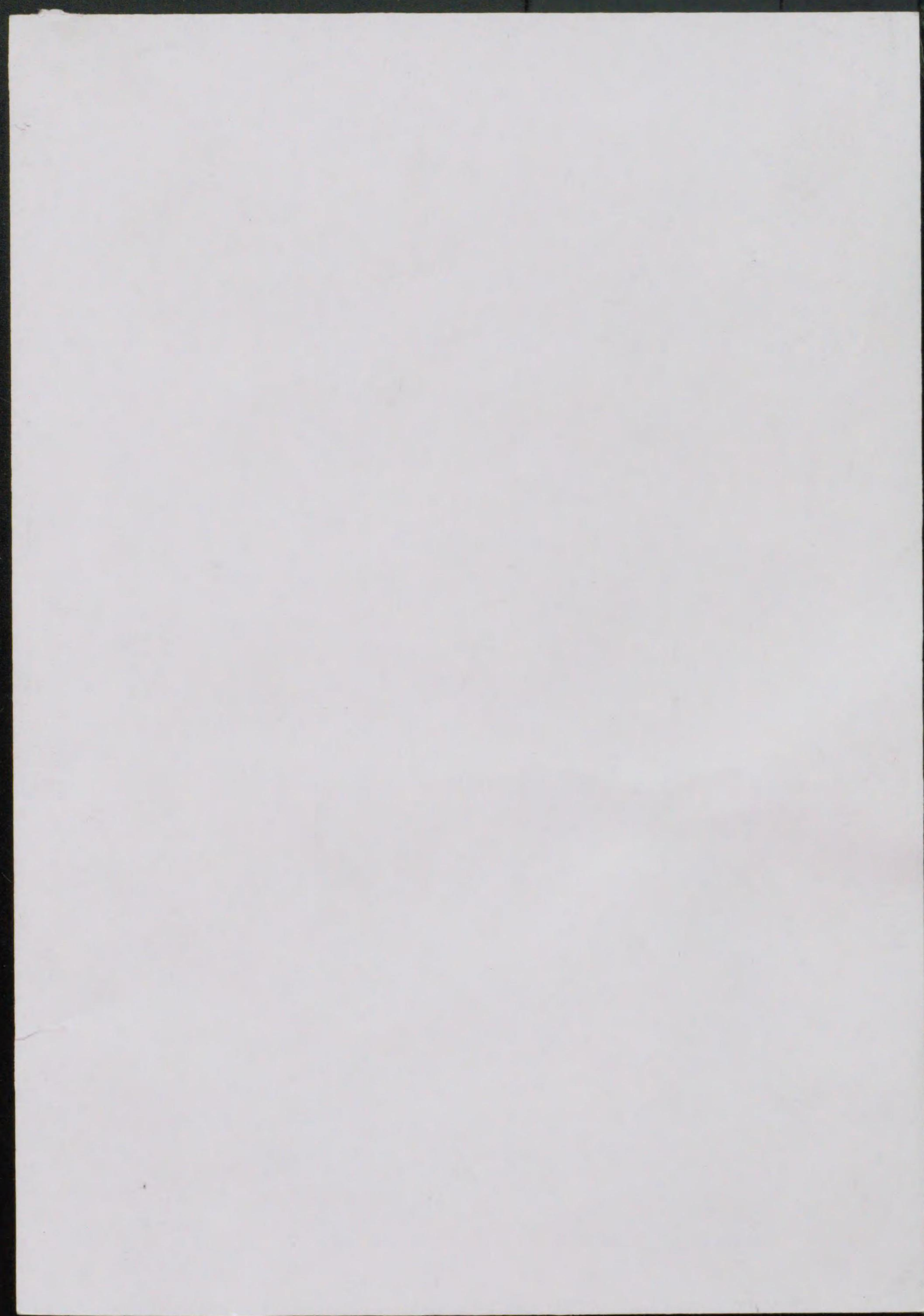
定價一圓五十錢
送料十錢

眞山青果著 川端龍子畫伯裝幀 償金四拾萬弗◇假名屋小梅

定價二圓五十錢
送料十二錢



508
209

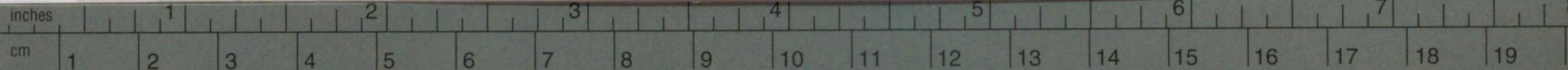


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

